

平成21年度 第1回「海上の森運営協議会」議事録要旨

日 時 平成21年10月13日(火) 午前10時30分～正午

場 所 愛知県自治センター5階 研修室

出席者 内田臣一委員 加藤岩雄委員 加藤倫教委員 木村光伸委員 國村恵子委員

竹中千里委員 松尾 初委員 マリ クリスティーヌ委員 山川一年委員

1 あいさつ

青木 章雄(農林水産部農林基盤担当局長)

2 協議事項

(1) 平成21年度の取組状況について

事務局

議題1「平成21年度の取組状況について」のうち ア 全体概要について 説明

座長

ただ今の説明に対して、質問、意見等の発言をお願いします。

委員

カシノナガキクイムシによるナラ枯れがすさまじいが、それに対してどういう対応を取るか。今の状況、来年秋のCOP10でエクスカージョンにお客さんも来られるが、ナラ枯れは、多分続いていると思うが、この現状把握と具体的な対策を何か考えているか。

事務局

ナラ枯れは、確かに昨年よりも相当多い。これから全体の数量の調査は行う。昨年は、部分的に枯れたところもあったので対応したのは、ナラの幹のところに虫が入っているの、それを防除するため、そこにビニールを巻き脱出を阻害するという措置をした。また、歩道沿いや修景上必要なところは伐倒し、伐採木の根元の幹も防除措置をした。

今年は、昨年にも増して被害が出ている状況であり、昨年のような防除措置と危険なと

ころは伐採していきたい。今、その調査を進めている。

ただ、ナラ枯れは、全部が全部枯れるというわけではなくて、去年は、潜入された樹木の1割5分ぐらいが枯損したという状況。また、いったん虫に食われて入ると翌年は、その樹木は食害されないとは聞いている。

委員

森林の遷移は、今までの状況だったら自然の遷移に任せていたら常緑広葉樹林に遷移していくのは少なくとも50～100年かかると思う。今のナラ枯れの状況だとかなりまとまって枯れているようなところもあることから、そういうところでは一挙に遷移が進行するのではないか。

海上の森の自然環境の変化の歴史の大転換が今、起こっているのではないかとすごく心配している。重大な事ととらえて、今年度の事業計画の中で例えば森林モニタリング調査の内容を変更できるところは変更して緊急に現状を把握するなど必要ではないか。

さらに、みんな心配していて、急激に枯れていますから、例えば専門家ではない人は万博を開いてその辺の自然をいじったから悪い影響が今になって出てきて枯れているのではないかなど、疑心暗鬼になっている。

早急に現状を把握されて、一般の県民向けに現状をきちんと説明するなど、もう一つ踏み込んだ対応をお願いしたい。

そういうことは、愛知県の農林水産部の人ができるしかない。里山で見たところ海上の森の周辺が一番すごい。

委員

問題は、これも自然の遷移の一つかなと思うか、思わないかだと思う。生えているものは枯れる、樹木にはそれに寄生する昆虫もいるのだと考えるのか、そうでないのかということが一つ大きな問題としてあると思う。

海上の森は、ここ3年ぐらい非常に急激にひどくなり、そこから10kmと離れていない私共が管理している森でも今年、大量に出ているが放置しておくことにした。それがそのまま照葉樹林化へは行かないだろうと目算をしている。

カシナガの話は、昔から日本中に少しずつあって、そこで遷移が急に進んだという話はほとんど西日本でも聞かないということもあり、放置しておいたらいいのだろうと思う。

ただ、見苦しいので、海上の森のように、これからさらに生物多様性の宝庫だと言い続けていかなければいけないところでは、大いにいろいろな作業をしていただきたいと思う。

それと並行して、こういう現象があることが自然界ではしばしば起こるのだということをはっきりすべきだろうと思う。

それと、あれは松食い虫と同じだといわれる人が見えるが、それは違うと思う。松くい虫とはプロセスが違う話として考えなければいけないと思う。

数年たって完全に枯れたときに、枯れたものは伐倒し、事故が起こらないようにする必要がある。それは非常に心配する。

委員

三重県の方では、シイも被害があるようである。全国的になりつつあるというのが現状だろうと思う。コナラの森というのは人が入ったところで、放置して出来上がってきた森と解釈していて、人が手入れした以上は、手入れしていくべきと思う。

崩れるというのも自然の遷移と見れば遷移の一種かもしれないが、がけが崩れるというような状況になってくる可能性も出てくることを考えると、きちんと把握して防除していくことが必要になってくると思う。薬剤散布は好まないが、防除によりどう変わっていくか明確にしておくことは必要。それと、一般の方にももっと公表しておくことが必要だと思う。

委員

先日の台風による、倒木や落枝等が結構あったと思うが、それとも関連し、常日ごろ、景観10年、風景100年、風土1,000年ということで、海上の森を観察される方々やエクスカージョンも含めてであるが、確かに見栄えという点でどうするかということだけは問題だと思う。

結局、里山としての営みができなくなったことで里山林自身のコナラ、アベマキの二次林が、今、そういう状況にあるということはある意味受け入れなければならないことだと思う。

カシノナガキクイムシのことであまりにも強い防除策や駆除策ということで考えなくてよいと思うが、ただ、景観や風景や風土という点からはきちんとそれなりの対策は取ら

なければならないと思う。

自然の遷移は受け入れており、依然、このあたりの花崗岩の地質上の問題だと思うが、マツが健全であったころのやせ山のときは、全山、コバノミツバツツジがきれいな地域であったが、それらも今、コナラ、アベマキに変わってきている。それぐらいもう遷移している。

大気汚染の問題であるとかいろいろなことがあってこうなっている、自然の生態的な遷移の中でこうなっているのだということは考えていかなければならないことだと思う。

ただ、ナラ枯れの後に何が生えてくるかという、日照を好むようなアカメガシワやクサギなどいろいろなそういう陽樹が入り込んできて、随分また変わっていくと思う。そういうところもあらかじめ念頭に置いた上での修景を考えていかなければならない。

最初に申し上げた、この間の台風被害の落枝、倒木等についてはいかがか。

事務局

台風の後ですが、倒木は、4～5本あった。それは、松食い虫による枯れ松で、カシナガで倒れたものはなかった。

それから、広葉樹類の根の浅いものが、斜面の部分で倒れたものがあり、除去した。

委員

先程、これは松枯れとは違う仕組みで起こっているという意見がありましたが、補足していただけないか。

委員

松枯れも最終的には原因がよく分からないままですが、最盛期には大気汚染との関係が非常に強調されていた。事実そういう分布に近いようなところがあったりしたものですから、そういう関係が大きいのかなと見えていた。「あんなものはもう要するに裸子植物の終わりの時代が来たと思っている。」というような非常に乱暴な言い方をする人がいたが、種の交代時期という意味では、種が絶滅するのがいいという話ではなく、ある地域における種の交代という意味では、あれはあれで受け入れるべきだったのだろうと思う。

カシナガの方は、在来で、もともとずっとあちらこちらで散発的に起こっていたという記録はある。たまたまここ何十年かこの辺でほとんど見たことがなかったものですから驚

いているが、10年ぐらい前、関西、六甲山系の下の方あたりで急に出たことがあり、問題になっている。

いずれにしても別の委員が言ってみえたように里山のなれの果てに入り込んで悪さをしているのだというのが圧倒的に大きな特徴なのだろうと思う。

この後もう一回コナラ、アベマキの陽樹がどんどん育っていけばそれは自然に収束して元の風景に戻るかもしれないし、あるいはこの先に、照葉樹林化していくことも一部にはあるかもしれないけれども、そんなに大きな変化はないだろうと思う。そう言っている間に20年位はかかる。その間のまさに風景はどうするかという事が大きな問題だと思う。見苦しいという意味では、同調したい。

委員

今の意見に結構反対なのです。なぜかと言うと、時間軸で見ていると確かにそのとおりです。長い時間軸で見るとそのとおりであるが、今までの、自然林と称する海上の森なども人間が手を加えて一度破壊されて、それから自然的に出てきた、手を加えなかったから出てきたという森になっている。今の状態からいくと、やはりその弊害が出てきて見えるような気がする。

感想的なものの見方をすると、イノシシやシカが特に最近下に目立っているということがあるが、山の上の方に行ってみると、森林が手入れされず放置されているため森の木が育って、下に下草が生えていない森林が出てきている。そうすると、そういうところで生活していたものが下へ降りてきているという見方もできる。

やはり人間が手を加えてきた山である以上、ある程度は手入れしていく必要があると思う。現状を把握し、将来どのようにしていくのだということをきちんと見極めてから、考えていく必要があると思う。

委員

私は、放置しておけばよいと言っているのではない。見苦しいから伐りなさいと申し上げている。ただ、メカニズムとしては放置された二次林のなれの果てだということ。里山として維持するのであれば里山整備は、きちんとやっていかなければいけない。その時に、ことさらにカシナガの被害木をうんぬんする必要はないだろうと思う。

もう一つは、被害木がいずれ倒れていくわけですが、その後のパッチがどう復元してい

くか、しっかり見ていく必要がある。いろいろなものが入り込んでくる。陽樹が入り込んでくるだろうと思うが、簡単に教科書どおりには入らない。そこで何が入ってくるのか、あるいは今、海上の森にあるものがきちんと戻っていくのか、あるいは思っても見ないものなどが入ってくるのか、そういうことをきっちりモニタリングしていく必要はあると思う。ですから、放置してくださいと申し上げたわけではない。

座長

このカシナガの問題は、日本森林学会、学会連盟においてのシンポジウムでも激論が交わされるぐらい、どうして今こんなに広がっているのかというのが分かっていない。温暖化も関係しているのではないとも言われる。ですから様々な要因があるので、今、現に海上の森で起こっていることに対し、限られた予算の中で今の森林の状態をきちんとモニタリングがどこまでできるか。その中にこのナラ枯れの問題もしっかり記述し、今後どうなっていくかを見極めるということ。

それからこの問題はこの愛知県内あちこちで広がっているので、里山に関するいろいろな情報の発信の場としてセンターを位置付けるのであれば、やはりセンターに様々な情報を置いておいて誤解のないようにする。大気汚染の影響ではないかとか、万博の影響ではないかなどと思われぬよう、現状で分かっている、学会レベルでも分かっているところを展示するなり、情報発信できるような形が望まれるのではないか。

あと現に枯れている木の始末ですが、危険性のないよう、また景観上からも管理することはセンターの仕事だと思う。カシナガの問題はそのくらいにして、他に意見を願いたい。

委員

森林の自然環境調査ですけれども、これはモニタリングでは広域なところを何地域か、広葉樹の森を何地域かとかいう形で実施されているということですか。万博の時に色々な希少種などが調査されてきていて、現在どうなっているのか。

植物などは、環境が変わってくるとなくなっている場合もあつたりする。こちらでは稀少動物のムササビやホトケドジョウの2種類と猛禽類調査ということでの目立つものしか調査されていないということであるが、現状というのはどのようにとらえられているのか、また、今後どうするように考えているのかお聞きしたい。

事務局

モニタリング調査は、5地域で実施した。海上の森全体では、10地域を対象としており、年5地域ずつで10年間を見通し、次の5年後にまた実施する。長期的なところで見ていきたい。

希少な植物は、動物以外ではシデコブシや湿地の植生ということで、湿地については有識者の先生に、一度、海上の森の湿地の10年前とそれ以後、今どうなっているかというのを調べていただき、報告書に取りまとめた。

その中で除伐が必要だとか、もう少し光条件を改善すべきということもあり、要所、要所ではそのような対応していきたいと考えている。

また、今、名古屋大学の先生の方でも海上の森で、シデコブシを研究対象として実施していただいているところもあり、学術的な成果、報告書も出てきている。それを踏まえて、また今後、除伐等の整備を進めていきたい。

委員

海上の森センターの管理の中で、私どもがずっと調査等に携わってきているが、センターの職員は、2～3年で代わられる。現状をどこがどのように把握されていくのかということをお聞きしたい。

結局、調査結果やモニタリング結果をどのように最終的にまとめるか、どういう考え方であるのだということを一統一的、計画的にどう持っていけるのか。自然が相手なものであり長いスパンでものを見ていく必要が出てくる。統一的にものを見たりすることのできる方を恒常的に配置していく必要があるのか、ないのかも含めてお聞きしたい。

事務局

最初に海上の森にかかわったのは、平成14年、人工林の間伐を本数率で35%程度実施し、その後どのように変化したのか経年変化を見たいということで、過日、8年後どういう状況に森林や植生が変わったのか見に行った。変化を期待していたが、8年位では無理だったのかな、あるいは間伐がもっと35%といわず半分以上、実施してもよかったのかなと。やはり、机上で描いたことと結果が違っていたということを肌で感じた。

そういう意味で継続して調査結果を残すなり、あるいはモニタリングというのはまさに

そうであるが、定点観測を継続していく。そういったものが受け継がれるシステムが必要かなと感じた。職員は2～3年で代わるしまう点があるが、何らかの継続化するシステムを作っていく必要がある。

あるいは、組織としては海上の森センターもあるが、センターと協働して保全等の活動を行う「海上の森の会」という会があるが、経験を積まれて、一つの組織がずっと携わっていくというのものもあるかなと思う。

事務局

県は、どこの部署でも今3～4年でローテーションを組んで人事異動が行われる。農林基盤担当局には林学関係と農業土木関係があるが、ほとんど他の職種との交流はない。

従って、林学は林学関係の中で該当部署を異動するので、ある意味で専門分野は3～4年で人が代わってもその中身はそのまま引き継いでいかれる。

また、里山の再生等の手法については、今年度からの新しい「あいち森と緑づくり税」を活用し事業を実施しながら地域といろいろなコンセンサスを得ながら進めていくこととしている。また、いろいろな大学もそれを研究したいということで実施しているところがあり、今後やりたいという大学側からの要請もある。そういったデータを蓄積して、地域毎に特色があると思うので、そういうところへ反映していきたい。そういうデータも海上の森のデータと取り合わせて運営していけたらいい。

ただ、自然に対して、先ほどから各委員から議論が出ているが、どこまで手を入れて、どこまで自然に任せるかという判断は非常に難しいと思う。色々な意見を聞きながら併せて検討していきたい。

委員

先ほど事務局から言われたように、現物をきちんと把握することは大切だと思う。継続的にもものを見ていかれる方をある程度作っていく必要があるのでは。そういった仕組みを作るというのを考えていただき、それがまた蓄積されて残って次につながっていく、そういったことを考える必要が出てきているのと思う。

先ほどパッチがどう変わっていくのか。マツノザイセンチュウの話もいろいろあったりして、そのパッチがどう変わっていくのかということです。現象としては一緒だと思うが、専門の方は分かっているのかもしれませんが一般の方は分かっていない。そういうものを公表し

ていくというのにも必要になってくる。そういうことも含めて技術なり思いを継承していく
というか、どういう形でされていくのかということをご検討いただけたらありがたい。

委員

これは県の職員の配置の問題ではない。あいち海上の森センターを作ったときに大事な
ことが一つあって、ここでは調査研究はやらないとされた。それが大前提で、それでみん
な苦労して何とかそれにつじつまを合わせている。

そのときに頑張って調査研究をやらないならこんなものは作らないと言ってしまえばそ
れまでだったかもしれないけれど、そうしたら多分こんな施設はできなかつただろうと思
う。取りあえずスタートさせるためにはそういうことはやむを得なかつたのだろうと思っ
ている。例えば標本を置くバックヤードすらなかつた。作らなかつた。その時に、ではそ
の代わりどうするか、周辺には大学もたくさんあるのでそういうところと連携しようとい
う話はあった。その後、連携はしていない。

それから、確かにそれぞれの研究者が興味を持ってあそこで研究をしたいという申し出
はたくさんあるのだと思う。今も名古屋大学を中心にいろいろなところで研究されている
が、そのコーディネートをきちんとセンターでやっていく。出来上がったデータはきちん
とセンターの方で維持していくという、そのところがやはりまだできていない。これか
らぜひやっていただきたいと思う。

里山人材育成推進費がありますよね。あいち海上の森大学と人と自然の共生国際フォー
ラム。こういうところで本当の意味の森林調査のプロとは言いませんが、この地域で森林
調査を持続的にやっていく方を養成していかなければいけないと思う。

委員

海上の森大学のそれぞれのコースを卒業された方がどれくらい活用されてかわって
おられるのか。調査の分野等、あるいはプランニングというところでどのようにかわって
おられるのかということもお聞かせください。

事務局

あいち海上の森大学の設置目的が実践活動人材を養成するということで、いわゆる地域
で活動してもらうこととしている。ですから、卒業してから5年間は地域でどんな活動を

したかいうことを報告してもらう、また、活動内容もお互いに情報交換するという意味で発表会といったことを実施している。

ただ、調査の話は、大学のカリキュラムの中でも森林調査ということで間伐のやり方などの調査はあるが、植生などかなり高度なレベルの話になると相当きちんとしたコースで実施しなければならない。現実、今の卒業生の中ではボランティア的に地域の活動で伐採する木の選木などはやっている方はおられるが専門的な意味で植生調査まで踏み込んでいる方は少ないような状況です。

委員

調査もそうなのであるが、管理の問題も絡んでいると思う。継続的に見ていってどのよ
うに管理してくると里山は今の状態が維持されるなり、木材がきちんとなるなりという管
理の仕方というところが計画的でないといけないという認識をしている。調査もあるが、
その後の管理を継続的にどうやって見ていくかというところをぜひ考えていただきたい。

座長

やはり人材は非常に重要で、センターの役割が情報発信ということであれば、この人に
聞けばもう海上の森のすべてこの10年全部分かる、というような人材が必要だと思う。
情報を受け継げばいいというものでもない。人事のシステムで仕方がない部分があるが、
その辺は特殊事情で、海上の森について深い見識を持って管理を責任を持って務められる
方、非常勤でも構わないのかもしれないが、無理と言わず、海上の森センターの機能を発
揮するような人材配置をお願いしたい。

それは、海上の森大学を卒業された方も、海上の森の会の方もそうなのだが、何をすべ
きかということを考えられ人材を配置するということをよろしく願います。

次にCOP10に向けた取り組みについて、事務局から説明を。

事務局

イ 海上の森でのCOP10に向けた取組について説明

委員

COP10絡みの第1回検討委員会の結果の説明のところ、エクスカージョンの話で

10月は微妙なという言い方だったが、どういう意味か。

事務局

あまり見るものがない。例えばシデコブシだったら花が咲いていないなど。

委員

そういうことを言っているから駄目なのだと申し上げたい。シデコブシの時期は楽しいでしょう。ハッチョウトンボを見るのも楽しいと思うけれども、そういうことだけが生物多様性ではない。そういう希少種を見にくるのが海上の森ではないのだということを言ってきている。10月に何もなければ10月にこそ見せてあげようと思わないとエクスカージョンをやる意味がないのでは。

委員

私は、田んぼの学校をやって3年になるが、海上の森の体験プログラムでは田植えが5月31日で稲刈りが10月4日ということで取り組んでおられるが、里山の再生をしているということもあって、ちょうど10月の時に稲刈りと時期を合わせ見学いただく。

それから赤とんぼの中のアキアカネについては田んぼとともに生きてきたトンボの代表種で、最近、明らかに激減していますので、全国調査をしているが、アキアカネが群れをなして黄金色の田の上を乱舞しているような状況なども海上の森の里の地域で見てもらうということはまさに生物多様性の一つであり、私たちの国の文化や里山をある意味象徴的に体感していただけるものと思う。

渡りのアサギマダラもおりますし、秋に出るトンボ類もたくさんいる。アケビの実もあればいろいろな木の実であるとか、それなりに10月というのは見るものがたくさんある。そういうものが陸上のほ乳類とのつながりもあるので全体的に見てもらおうということで、生物多様性そのものが体感できる森と里の体験をしていただきたいと思う。

委員

入場者の表を見ていたら10月が一番多い。どうしてこんなに多いのかなと思った。

一つ提案させていただきたいことがありまして、COP10に関してなのですが、COP10までの間にエクスカージョンをやるための一つの練習としても、例えば名古屋

にインターナショナルスクールがあるので、英語で勉強している子どもたちに来てもらって、子どもたちがどんな質問をするのかなど、英語ができる方と一緒にやれば、材料にもなると思う。子どもたちにもたくさん来ていただきたいと思いますし、子どもたちの聞く英語も非常に深いものもあるわけですから、英語でパンフレットを作ると説明されたのでよかったなと思った。

委員

海上の森の会です。一つだけ宣伝しておきますと、万博前夜に発足した会ですが、協働の立場から先ほど説明があったように色々、県の委託を受けた事業も展開している中で、組織強化ということで、11月8日にNPO法人の設立総会を開いて組織強化を図っていると考えている。

今、COP10もどうするということも含めて、どうも愛知県と名古屋市の姿勢のようなものがいまいち歩みが違うかなということも感じることもある。もう少しよく見えるスタイルを作ってもらえるといいなということと同時に、民間の知恵、組織力など色々なものを集めていくようなことも必要ではないか。

私ども森の会では、幾つかのグループの中の一つで毎週木曜日に植物調査会という定点観察をしており、先ほど出たような今何本ぐらいの木が枯れているなどということなど、お答えできるデータを持っている。あるいはシデコブシがどのぐらいあるということは、瀬戸市の中の研究会で調査し、一万二千何本ある。海上の森では何本あるというところまで数え上げたデータを持っている。そういうものを集めていくような組織というものも非常に必要ではないかと。

最近、自然保護協会の方からCOP10に向けた形での調査依頼とエントリーのシートの提供があった。このエントリーシートというのは、海上でかつての生活と自然の在り方がどう変わってきたかということを緻密に調べないと出来ないものです。このようなことをもっと生かしていただくといいと思っている。

特に、エクスカッションの地域については私どもも大きな役割を果たさないといけないということで、ため池再生のための研究会も続けてきている。その先に里山を再生して、かつての水田を棚田、土手、あぜを復元して、そしてかつて三つあったため池を作り上げていこうと思うと、ただ単にCOP10のためだけの一回きりで終わりという事業ではとてもやりきれぬ事業ではない。先を見据えたような里山再生のためには何が必要だろうと

いうことを皆さんのご意見を聞きながらやっていきたいと思っている。

委員

本日は、海上の森の協議会ということですが、生物多様性条約の締約国会議が来年あるので、関連で申し上げたいが、様子を見ると、県は海上の森、名古屋市は藤前干潟というパターンでということがあります。

海上の森では里山を発信するということはそれはそれで結構だと思うのですが、機会があるときには申し上げているのですが、せっかく県の方は海辺の方に施設がある。例えば、木曾崎や弥富の野鳥園で自然再生の事業はそれほどお金をかけなくてもできる。きちんとしたデータを見ていただくとか、どのように手を入れたらいいか、現実には弥富野鳥園などは今ほとんど野鳥が来ないという野鳥園になっていますから、そういったことをきちんと分析して、せっかく干潟を埋め立てて作った野鳥園で干潟の鳥が見られないという状況を解析し、海上だけではなくて、里山再生だけではなくて、そういった海辺の荒廃湿地みたいなところをきちんと再生しているという姿を見せていただきたい。

委員

運営協議会は、確かこれまで2時間の時間設定でやっていた。年2回、集まってもらい、忌憚のない意見を聞きたいのなら、しっかり設定してもらいたい。

座長

最後の方では色々のご意見が出ましたけれども、もっと色々意見を伺いたいのに時間設定が短くて残念です。

このCOP10の取り組みに向けてのエクスカージョンの話に関しても、この会の中でももっといろいろな情報が引き出せるとも思った。あまり時間がないということであれば、メールでも何でもいろいろな情報を集めて、せっかく委員の方たちが真剣に考えていただけるので、もう少し有効にこの協議会を生かせるようにしていただければと思う。もちろん今回出てきた意見は非常に貴重ですのでぜひ反映させていただきたいと思う。

それから、以前も依頼していた、この会議の前に委員の方たちからも議題を集めてここで議論する場にしようとお願いましたが、それも今回あらかじめ議題を集めることがなかった。今回、時間がないのですけれども、こういうことを次回ぜひ話してほしいというもの

があれば。

委員

一つ、海上の森の木材の利用も含めた論議をしたいと思う。木を切ってそのままにされているという状態で、ほかの山へ行ってみると、伐りっぱなしというのは、いろいろな植生が生えるにしても、木が腐るにしても何年かはかかる。その辺を早く促進させるには木材の利用も必要になったりするものですから、その辺のところの論議をしたいと思う。

座長

以前かからゾーニングをしてそれぞれの管理について議論したいと言われてたことですね。次の機会にぜひ話したいと思う。

今、出ました要望を反映させていただきたいということで、座長としての締めとしたい。

事務局

今日は時間が短かったということで、次回の3月は、十分に時間が取れるよう午後の設定にしたい。